

もしかしたら・・・やっぱり・・・そうだね  
<平成 28 年大相撲三月場所観戦の記>

昔から「荒れる三月場所」と言われていて、何が起きるかわからない面白さがあるのが三月場所。しかも「地元出身力士への激しい応援」とそれに応えようとする地元出身力士たち、この図式は九州場所とともに双壁と言われている。結局は落ちつくべき所に落ちつくとしても、そこに至るまでの過程が面白い場所が多い。平成 28 年三月場所は、先場所優勝した大関琴奨菊が「優勝またはそれに準じる成績をあげて横綱になるか」という騒動で始まった。私の見解としては（先場所後に書いた拙文を参照下さい）そのようなことは考えられないし、あつてはならないことと見ていたので、問題にもしていなかったが・・・。

さて場所が始まって見たら、初日に白鵬が敗れて波乱のスタート。前半戦を終えた所で稀勢の里 8 戦全勝、琴奨菊・豪栄道 7 勝 1 敗と想定外の星でマスコミはさらに浮足立ち、日本人対モンゴル出身力士の戦いという構図を煽るような表現も感じられた。

この場所の活躍力士を中心に、15 日間を振り返ってみる。

稀勢の里は、横綱に敗れた二戦以外は落ちついて慎重さの見える戦いぶりだった。欠点とされる腰高は是正されてはいなかったが、「慌てて攻めるのはよそう」「最後は極力腰を低くしよう」と言い聞かせているような空気を感じられた。今場所の成績は、優勝争いに加わり 13 勝 2 敗と評価できるが、先場所の成績を見る限り安定度には若干の疑問は残る。（琴奨菊の 6 場所の成績に比べればかなり安定しているが）

平成 27 年 5 月	平成 27 年 7 月	平成 27 年 9 月	平成 27 年 11 月	平成 28 年 1 月	平成 28 年 3 月	6 場所計
11 勝 4 敗	10 勝 5 敗	11 勝 4 敗	10 勝 5 敗	9 勝 6 敗	13 勝 2 敗	64 勝 26 敗

表-1 稀勢の里の 6 場所の成績

平成 27 年 5 月	平成 27 年 7 月	平成 27 年 9 月	平成 27 年 11 月	平成 28 年 1 月	平成 28 年 3 月	6 場所計
6 勝 9 敗	8 勝 7 敗	11 勝 4 敗	8 勝 6 敗 1 休	14 勝 1 敗	8 勝 7 敗	55 勝 34 敗 1 休

表-2 琴奨菊の 6 場所の成績

出足がある力士なので、右の上手を浅く取るように心掛ければ相手の力を封じるとともに、自らも重心が降りてきて安定度の高い攻めが確保できるだろうと思う。これを解決できれば毎場所優勝を争える状態になり、その結果としてさらに上へと進む道も開けると思うが・・・。

怪我で低迷していた豪栄道がようやく五体健全な状態で場所を迎え、ご当所力士であることも合わせて気力は充実しているように見えた。不利な体勢になるとすぐに叩こうとして墓穴を掘るという悪い癖が影をひそめて、攻めを主体とした相撲が光っていた。関脇から大関に上がる頃の豪栄道の相撲を思い出させるような動きで、ことによると・・・と思わせたが、終盤になって上位戦で「叩きぐせ」と「首投げ」という二つの癖が散見し、やはりまだ・・・とがっかり。最後にまた太ももの筋肉を痛めてしまい冴えない千秋楽になってしまったが、復活を感じさせる 12 勝 3 敗はまずまずの出来映えと言うべきだろう。

大怪我を克服して前頭筆頭まで躍進した琴勇輝、おおかたの見方は「負け越して跳ね返される場所」だったが、何と横綱・大関を駆逐して 12 勝 3 敗という好成績を収めた。力強い突き押し、止むことのない前進圧力、絶対に引かない叩かない相撲が功を奏した。同じ部屋の大関が綱取り騒動の中で 8 勝しか上げられなかったが、弟弟子が代りに 12 勝を上げてしまった。と誉め言葉だけで終わってしまったのは面白くないので、苦言もひとこと付け加えておきたい。琴勇輝の立ち合いは、（自らの突貫相撲を成就すべく）相手との呼吸合わせは意識せず、ただひたすら自分の好みの立ち合いができるようにだけしか考えていないので、「待った」や立ち合い不成立が目立つ。昔から佐渡ヶ嶽部屋の力士に目立つ傾向なので、師匠がそういう指導をしてい

ないことによるものと考えられるが、改善すべき課題である。また、時間いっぱい、最後の仕切りで奇声を発するのもただけでない。何年か前まで千代鳳も同じことをしていたが、どなたかから苦言をいただき止めたようだ。神聖な土俵上の儀式に水を指す行為なので、これも改善すべき課題だろう。

勢もご当所力士で声援の大きさは大関に負けぬほどだった。何よりも、攻めが早くなり「勢の型」が出来上がってきている感じがした 15 日間だった。中日まで 7 勝 1 敗で突っ走ったが、後半で上位力士と当てられて 10 勝 5 敗に終わった。ここ数場所の相撲内容と成績から見ると毎場所進歩の跡がうかがえ、上位の壁を突き破る日は近いように感じられる。勝利の後のインタビューでも、自分の相撲を振り返って丁寧にしかも控目に説明しながらの語り口は、けれん味のない相撲と合わせて好感を抱かせる。

妙義龍が復活した。東前頭 6 枚目で 12 日目まで 10 勝 2 敗、元関脇がこのまま行くと・・・と期待した人もいたようだが、終盤で失速して 10 勝 5 敗に終わった。鋭い立ち合いからの突き押し、前さばきが見事できれいな四つ相撲、機を見ると次の手が繰り出される妙義龍相撲が数多く見られた。この力士は、豊ノ島と並んで関脇か小結にいて活躍してくれないと困る力士の一人で、来場所が楽しみ。

このところ新入幕力士が目立つようになり「次の時代への胎動」を感じさせる場面が増えて来たのは良いことである。今場所光っていた若手は再入幕の大栄翔と入幕 3 場所目になった御嶽海。

大栄翔は平成 27 年 9 月新入幕ではあるが、二場所で跳ね返されて今場所再入幕を果たした。今場所は突き押しに徹して、しかも不要な叩きやいなしをしない前進型の相撲で 10 勝 5 敗の好成績。幕内定着の力を感じさせる場所だった。

新入幕後やや苦労した感じだった御嶽海、今場所は鋭い立ち合いと素早い攻めが目立ち、幕内の水に慣れて来た感じがした。突き押しにも勢いがあり、常に前に圧力をかけつつも残り腰を備えており安心して見られる。まだ大銀杏が結えない状態ではあるが、幕内中堅または上位へ進出する来場所が楽しみな若手である。なぜこの両力士のいずれかに敢闘賞をあげなかったのか、相撲記者クラブの識見を疑う。

惜しくも勝ち越しはならなかったが、西前頭 11 枚目の阿夢露の相撲を評価したい。191 cm の長身ながら前傾姿勢を保ちながら前みつ・横みつを狙って、頭を付けて食い下がり機を見ると出し投げを打つなど外国人力士には珍しい地味で着実な相撲を取るようになった。新入幕当初はやや乱暴な力技を繰り出していたが、膝の大怪我の後正攻法の相撲に変わった。未だに膝はきちんと曲がらず、やや傾いた蹲踞の姿勢だが、毎場所少しずつきちんとした相撲の型をマスターしている感じで、結果が目に見える力士の一人である。

さて最後に 36 回目の優勝を果たした白鵬の今場所について触れて見たい。

伊勢ヶ浜部屋の猛稽古で毎場所着実に力をつけている宝富士に敗れた。場所前の稽古でそれを実感してはいったと思うが、ここまでやるとは思っていなかったのかもしれない。土俵下に落ちた白鵬の表情にその驚きの大きさが表れていた。さすがに連敗はしなかったが、前半戦の相撲にはややぎこちなさが散見した。中日まで来たら、いつもならば取りこぼしをするはずの大関陣がきちんと白星を重ねているので、これを見て白鵬は「ことによると優勝できないかも・・・」と焦りを感じたと想像できる。そして日に日に「負けるわけにはいかぬ」「勝たねばならぬ」の気が増して、「勝負への執念」を強く感じさせる相撲が続くようになり、大関戦以降での「鬼気迫る早さと鋭さ」に繋がった。

一方では大阪場所特有の観客の反応、好勝負には惜しめない拍手喝采、つまらないと感じた勝負には露骨なまでに明確なヤジの反応、やがて何割かの観客の反感を買う結果に・・・。

その昔、連戦連勝で手がつけられない強さの北の湖に、大阪の観客席からは「北の湖負ける～！」というヤジまでが何度も飛んだ。

大関の奮起活躍が一過性のものでないとすれば、来場所以降の展開が大変興味深いものになる。相撲人気と相撲界の発展を占う場所がしばらく続くか否か、その命運が大関陣にかかっている。

以上